

ぼんじ

岡田の梵字碑

岡田の梵字板碑は、筑紫野市岡田にある老松神社社殿後方に建てられた覆い屋の中に、安置されています。平成8年ころまでは、鳥居のそばにありましたが、整備の折りに現在地に移設されたものです。

板碑には、上部に梵字で  (キリーク)、中段の左右に同じく梵字で向かって右側に  (サ)、左側に  (サク)と刻まれています。

なお、梵字とは、古代インドの文字で、仏教とともに我が国へ伝播されてきました。

この不思議な文字を、中国や日本では、呪術的で靈的な不思議な威力を持った神聖文字と考えました。

さらに、梵字は仏菩薩を表す文字としても



大切に扱われました。梵字  は阿弥陀如来、
 は觀音菩薩、 は勢至菩薩を表しています。梵字は、単なる文字としてのみでなく、梵字一字でも、その文字 자체が仏、菩薩を表すものとして使用されています。

このため、梵字を書いたり刻んだりすることは、仏像を刻んだのと同じ恩恵を受けるとされました。本板碑には、阿弥陀如来、觀音菩薩、勢至菩薩のいわゆる阿弥陀三尊を刻んだ事と同じ意味を持つことになります。このことから、岡田の板碑が阿弥陀信仰により建立されたことが分かります。

次に、梵字の他に文字がないかと碑面を観察しますと、板碑の中央に何か刻んであることが分かります。読みにくいので拓本を探り判読することにしました。

右側の写真は、拓本を採った状態です。石面の状態がよく分かります。



拓本図では梵字  の左側に「大」のようにみえるヶ所がありますが、石面の様子から傷と確認できました。

次に板碑中央に二行にわたり文字が刻まれています。「康永二二年八月」「廿五日」と読むことが出来ます。年号の次に「二」を並列に並べていますが、本来は「四」と刻むところですが、「四」は「死」に繋がるとして、忌み嫌われました。このように「二」を二個並列にしたり縦列に置いたり、あるいは「肆」と刻んだりしました。

ところで、板碑の建てられた康永4年は、南北朝時代の北朝方の年号で西暦1345年に当たります。

岡田の梵字碑が立てられた康永前後の九州の状況を紹介しますと、延元元年(1336)、南朝方の後醍醐天皇の皇子懐良親王が征西大將軍に任じられ、伊予の忽那諸島を経由して興国2年(1341)に薩摩に到着しています。

正平2年(1347)になると、懐良親王一行は薩摩から海路を利用して肥後の宇土に上陸し、肥後の菊池郡隈府へと北上して参ります。当時、隈府には菊池家第15代武光が懐良親王一行を迎えて、九州における南朝方勢力の拡大を図っていました。

貞和5年(1349)、北朝方の少弌頼尚は、足利直冬を大宰府に迎え入れ、対立した博多の一色氏を牽制していました。一色氏は一時期、南朝方に付きましたが、直義が亡くなると、直冬の勢力は衰えて長門へ逃げだしました。そうすると一色氏は北朝方に戻り、これに対立した少弌氏は南朝方として相争いました。

正平6年(1351)になると南朝方は筑後に進出して勢力を拡大し、正平8年(1353)2月には、北朝方の九州探題一色範氏と針摺原(福岡県筑紫野市)で戦います。

これにより、一色氏は敗退し、九州における南朝方の勢力が拡大していくことになりました。

このように、南朝・北朝とに分かれての争い

は、人々を不安に陥れたことでしょう。

板碑には康永4年8月25日とあり、当時の暦では秋の彼岸と見られます。この時代には、生前に自らの葬儀を行うことはやっていました。死後に行う仏事より、七倍の御利益があるとされるもので、これを逆修供養といいます。

明日をも知れない地元の豪族たちが、阿弥陀三尊の加護に預かり、現世来世の安樂を願い建立した物と思われます。

板碑のある老松神社は、江戸中期ころに書かれた『筑後國続風土記録』に「老松宮」と出てきます。祭礼は9月25日で、「いつれのころにや本村の神を勧請して産神とせり」とあります。この地域の有力者とその一族や住民達の守り神として祀られてきたものです。

また、老松神社の西側から北側にかけて、土壘があります。東側は「ナカンキド」と呼ばれる地域があり、有力な一族の存在をうかがわせます。

岡田の板碑が建立されてから8年後、筑紫野市を戦場とした針摺原の戦いが起こりました。康永4年の板碑を造立した人々は、打ち続く戦の中でも、きっと阿弥陀三尊の功德を授かることが出来たに違いありません。(前川 清一)

